

# ピグルの日曜日

戦後 81 年のいま、子どもたちに語りつくこと  
A world without nuclear weapons  
平和の思いをつなぐ〈5〉  
—紙芝居で語る家族証言—

講話とトークセッション  
佐藤直子・宇治川康江

2026年7月12日(日) 13:00~16:00

会場：世田谷文化生活情報センター 生活工房 4F  
ワークショップルーム B

参加費：無料

お申し込み：事前申し込みが必要です

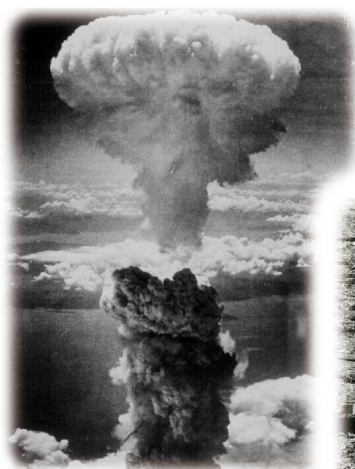
Peatix からお申し込みください

<https://nagasaki-setagaya2026.peatix.com>



↑ Peatix

主催：上馬親子心理相談室ピグル  
[piggle.kamiuma@gmail.com](mailto:piggle.kamiuma@gmail.com)





紙芝居には、人から人へ、世代から世代へと、思いを手渡す力があります。

戦後 81 年を迎える今年、「平和の思いをつなぐ一紙芝居で語る家族証言」は 5 回目の開催となります。戦争や原爆を体験した方々が高齢となり、そのお話を直接聞く機会は少なくなっています。だからこそ、体験した人の思いや記憶を、家族や地域の人々が受け継ぎ、語り継いでいくことが大切になっています。今年も、被爆二世の佐藤直子さんに、被爆されたお父様の体験をもとに制作された紙芝居を通してお話しいたします。翻訳家の宇治川康江さんには、『ナガサキ』に登場する被爆者の方々の人生や、その著者であるスーザン・サザードさんが世界中の人たちに伝えようとした思いについてお話しいたします。そこにあるのは、歴史の教科書に書かれた出来事だけではなく、一人ひとりの暮らしがあり、家族があり、未来への願いがあります。

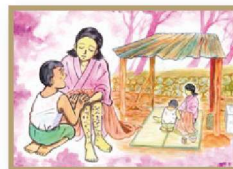
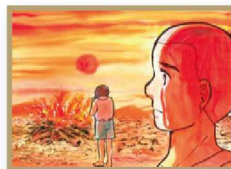
紙芝居と語りを通して、私たちは何を受け取り、これからの世代へ何を伝えていけるのでしょうか。

語り継ぐことの意味を、子ども大人も一緒に考え、平和の記憶を未来へ手渡す時間となれば幸いです。

被爆二世 佐藤直子(さとうなおこ)



1964年、長崎市生まれ。2014年度から始まった長崎市の「語り継ぐ家族の被爆体験（家族証言）」推進事業に登録し、被爆者である父池田早苗さんの被爆体験を語り継ぐ「家族証言者」として同年11月から語り部活動を始める。池田早苗さんは、被爆当時 12 歳。爆心地から 2km の長崎市小江原町（こえばるまち）で被爆。爆心地から 800m の自宅にいた早苗さん以外のきょうだい5人は、原爆投下から 10 日間で全員亡くなり、その後両親も原爆症で亡くなる。早苗さんは、自身の被爆体験の語り部を 30 年以上続けた後、7 年前に 86 歳で逝去。現在は長女である直子さんが、早苗さんの証言をもとに作成された紙芝居を使いながら、亡き父の語り部活動を継承している。



宇治川康江(うじがわやすえ)

東京都出身。高等学校卒業後、NHK 国際研修室等で通訳・翻訳を学ぶ。みずほ銀行、花王、デロイトトーマツ他で 20 年以上翻訳業務に携わり、現在も企業内翻訳家として就業中。アメリカ人ジャーナリスト、スーザン・サザード氏が 12 年の歳月を費やし書き上げ、2016 年度のデイトン文学平和賞を受賞した Nagasaki: Life After Nuclear War を翻訳し、日本語版『ナガサキ核戦争後の人生』(みすず書房、2019 年)を出版した。また、2023 年、サザード氏を日本に招聘し、長崎、広島、横浜、東京を巡る 6 回の講演を実施した。2025 年からは都内の中学校を中心に、長崎被爆者の体験を基にしたボランティア平和学習授業を行っている。



世田谷文化生活情報センター  
生活工房 4F  
ワークショップルーム B

キャロットタワー